

第二期 第九十二号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024.03.10 定有堂書店 発行

三砂慶明さんの果敢な仕事

主客二元論の信仰から懷疑へ

被災地で見えるもの

The Changing Same

本を作る側から (12)

汽水のほとりから (36)

プーチンの「大ロシア・パン」

東風吹かば…

鳥取あれこれ その九十一

八代日記 (四十六)

晴れの国へ、理想の教育を探しに

おかゆさん

ご案内

…… 編集後記

奈良 敏行

岩田 直樹

木元 健二

松田 裕史

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

ドラメリア



三砂慶明さんの果敢な仕事

奈良 敏行

(定有堂 主人)

定有堂があわただしく閉店になった二〇二三年の春、すべてを捨て去ることで精いっぱいだった。その中には身边のこまごました記録もあった。貰つていいですかと、古い記録の束をダンボールに入れて持ち帰ったのは三砂さんだった。そんなことを数回くり返し、定有堂の書棚までも運んでいった。彼の「読書室」の壁面で再生したその姿は驚きだった。

それから十一ヶ月が過ぎた二〇二四年二月、気がつけばダンボールの中の記録のあれこれは、『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』作品社という書物に変貌していた。表紙イラストは、あったような、なかったような定有堂の姿だった。表紙をめくると三枚目に在りし日の全景写真。もともとはホームページで用いていた萱原健一さん撮影の、カラーの生命感あふれる本屋の姿だったのだが、ここではモノクロに落とし込んである。開いた瞬間、目にうるむものがあった。時が止まった。やはりここではモノクロでなければ

ならないと思った。そして表紙の定有堂こそが「沫雪」なの
だと思った。

後退戦のどさくさに置き去りにしたものを拾う。よけい
なことだと言えは三砂さんに失礼だが、「わざわざよいな
ことをする、そこを「果敢」と呼ぶ」と書いたことがある。(三
十五号)

《「小さな本屋」というと見えているそのままだが、「果敢
な」と形容すると見えないものが重ねられてくる。》

《定有堂という「果敢な」というのは「ミニコミ魂」のこと
だ。それは何かをするために何かを準備するのではなく、いき
なり「何か」をする魂のことだ。》

三砂さんは不思議な人だ。たどりついた人生の課題は
「仕事をつくる」という事のようにだ。仕事をするのではない、
仕事をつくるのだ。目的が最初にあるのではない。わたしは
ここで初発衝動という言葉を用いるのだが、心に生じた熱
量に従いそれが形になるのをただ待っただけだ。目的がないの
に、なぜ形に昇華できるのか。三砂さんは説明の難しいこの
初発衝動に最近「モデレーター」という言葉を用い始めてい
る。この場所に立つと、立ち位置が単純になり、果敢な立ち
姿となる。心の「熱量」をコナトウスともいう。目的がなくて
もコナトウスは初発衝動を形(仕事)へと整えていく。

三砂さんのモデレーターとしての仕事に『本屋という仕

事』世界思想社という編著がある。そこにそのコナトウスを
語る。

《この本で目指したいと考えたのは、本屋を入り口にして
私たちが生きる世界に、新しい価値をつくくわえるための
道標を提示することです。》

新しい価値、道標、そこに三砂さんの仕事がある。という
よりも、そういう願いを仕事にしてもいいのだという三砂さ
んの発見と果敢さがある。三砂さんに「南に向かって北の星
を見る」と記したカードを送った。三砂さんの果敢さを称え
たつもりだった。

『町の本屋という物語』は、ほとんど三砂さんの本なので、
自分ではなかなか紐解く勇気が出ない。捨て置いた抜け殻
というのでもないが、過去をふり返る勇気はない。いまは
「沫雪」、定有堂教室をさらに十年つづけることを夢見てい
る。もちろん一人ではできない。講師の岩田直樹さんは、や
ろうねと言ってくれている。

三砂さんが編んだ『町の本屋という物語』は、どんな人の
どんな生き方を描くのだろうか。本のカバーには次のよう
なメッセージが拾い上げられている。

《人生のあるとき、立身して生きるか、それとも「自分ら
しく生きるか」の岐路に立つ。でも自分らしく生きるには才
能がいる。……わたしは本が好きでただで才能もない。で

も好きな本からは遠ざかりたくない。そんな時、「本を商う」という選択肢があったことがとてもうれしい。」

この言葉に出会い身震いするものがあつた。本屋になることは「目的」ではなく、本が好きという熱量、初発衝動が、生成変化していく果てに形と所を得た姿として語られている。ここにわたしの存在の物語がある。これが初発衝動、コナトウスなのだ。四十三年、つづめてしまえば、これだけのことなのだった。

2024.02.23

奈良敏行＋三砂慶明

『本屋という物語―定有堂書店の43年』 作品社 2024

三砂慶明編著 『本屋という仕事』 世界思想社 2023

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

3月26日 火曜日 19時から

テキスト 山内志朗『中世哲学入門』 ちくま新書

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

4月2日 火曜日 19時から

テキスト 木田元『現象学』 岩波新書

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

定有堂教室「読書室ビオトープ」小説を読む会です

3月7日 木曜日 第9回 19時から

テキスト 金原ひとみ『蛇にピアス』集英社文庫

会場 とりぎん文化会館 第6会議室

太極拳教室(葉香クラブ) 会場 ニカ所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 産業体育館

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(ナラ)

三段 公認B級指導員(みちる先生)

奈良敏行＋三砂慶明編

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』

作品社

本体2200円 46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024.2



【内容紹介】

本は、本屋は、これから大丈夫——そのように思わせ
てくれる一冊である。

本屋「Title」店主・辻山良雄さん推薦！

鳥取の定有堂書店は、いかにして地域の文化拠点となり、日本中から本好きや書店員が足を運ぶ「聖地」となっていたのか。名店の店主が折に触れつつあった言葉から、その軌跡が立ち現れる。〈本の力〉が疑われる今まさに、手に取るべき一冊。

鳥取に根を下ろし、一から自分の仕事を作りあげてきた奈良さんの言葉には、時代と地域を超えた普遍がある。それはとてもシンプルなことだ。「本が好き、人が好き」。いつの時代も定有堂書店は本と人とのあいだにあり、そうした素朴なスピリットが、その店を全国から人が集う「聖地」たらしめたのだ。

いま、本の力を疑いはじめた人にこそ読んでほしい。本は、本屋は、これから大丈夫——そのように思わせれてくれる一冊である。

本屋「Title」店主・辻山良雄

人生のあるとき、立身して生きるか、それとも「自分らしく生きるか」の岐路に立つ。でも自分らしく生きるには才能がいる。芸術家なんかそうですよ。私は本が好きなだけで才能もない。でも好きな本からは遠ざかりたくない。そんな時、「本を商う」という選択肢があったことがと

てもうれしい。

「小さな商い」はとてもビューティフルなものだ。ここが始まりで、ここが終わりという性質の、ささやかだが至福の場所なのだ。

(本書「本屋の学校」より)

【内容目次】

はじめに 身過ぎ世過ぎは草の種

第一章 町の本屋という物語

楽しい本屋は可能か／“夢を託す”ということ／どうして素人が書店を始めることになったかと言うと……／日常の可能性／本のことは井狩春男さんに教わった／本を並べる／本屋の愉しみ／ブック・カバーへの思い入れの話／定有堂から／人文書で、もうおともだち／町の本屋の物語

第二章 「書店」と「本屋」

「本屋」論／ザ・ブックマン／本屋は「舞台」なのだ／本の紹介は楽しい／本屋のカスタマイズ／「本屋アジール」論／本の泉／「書店」と「本屋」／ウェブ、そして町の本屋／町の本屋から生まれた本——『伝えたいこと』出版のこと

第三章 「身の丈」の本屋

人に教わり、本に教わる／座敷わらしの荒ぶる魂／本屋の学校／本屋を歩く／なぜ人文書なのか／本屋ですから／希望／本屋の源泉／スタンダードとカスタマイズ／京都書店研修会へいく／永六輔さんトーク&サインの会顛末記／朋有り遠方より来る／ノアの箱舟／バーチャル書店／町の書店に未来はあるか

第四章 本屋の青空

書と戯れる／就職しないで生きるには／脱個性／徳儀／一周遅れのトップ／書の底力／町に生きる／再生力／本屋と個性／本のビオトープ／好きだからやる

第五章 定有堂書店の生成変化

本屋の未来を創造する／定有堂書店の生成変化

附録 定有堂書店の本棚 往来のベシックセオリー

あとがき 一冊の本の衝撃

編者後記 三砂慶明

奈良敏行・定有堂書店略年譜

以上、作品社案内より引用

主客二元論の信仰から懷疑へ

— 洋上での「転向」 (三) —

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・

「読む会」 選書人)

二 船に乗るまで (2)

サブタイトルに「転向」があるとは、洋上で何か大ごとが起きたのか。実はカッコよさそうな「転向」という言葉を使っただけで、その意味を深く考えていたわけではない。

困ったときの辞書頼みである。手許にある『岩波国語辞典 第四版』(一九八六年)によれば、「立場・方向を変えること。特に、共産主義者・社会主義者などが、その思想を捨てること」とある。うーん、困ったな。今まで共産主義や社会主義を信じたことはないから、どんな思想、立場・方向を変えた／捨てたのだろうか。

私はバリバリの理系の人間である。定年退職まで高校で数学を教え、生活の糧とした。哲学・思想の愛好者ではあるが、根っこは理系頭だと思う。大学では理学部で地球物理学(私たちは「地物」と略していた)を専攻した。今は「地球惑星科学」と言って、おしやれな感じがする(そう感じるのは私だけ?)。

「地球物理学って何」と脳内に????が巡る人が大半だろう。四年前までは、小松左京による不朽の名作『日本沈没』(一九七三年)が描く世界、と説明していた。二〇二一年秋になると、急に地物がクローズアップされてくる(と私は勝手に思っていた)。

二〇二一年ノーベル物理学賞を受賞したのは真鍋淑郎先生たちである。受賞理由は「地球の気候の物理的モデリング、気候変動の定量化、地球温暖化の確実な予想」。真鍋先生の専攻は地物の中の気象学、気候学だ。

同年秋クールのTBS日曜劇場は『日本沈没—希望のひと』であった。今はテレビになくなった香川照之が扮する田所博士の変人ぶりは絶品だった。(地球物理学者は大勢のチームで動くため、実際はあのような変人はいない。)脚本や映像もプレートテクトニクスを理解した上でよく練られていた。

ここで百人に一人くらいは(拙稿の読者が百人もいらっしやるとは想像できないが)、次のような疑問を抱くはずだ。大気を研究対象にする気象学と大地を相手にするプレートテクトニクスを同じ学問に括るのは無理があるのではないかと。

なかなか鋭い質問である。地物とは「地球を物理学の方

法によって研究する学問分野」である。ある意味、物理学を用いさえすれば「何でもあり」なのだ。

私が学生だった頃は、「固い」「軟らかい」「もつと軟らかい」という三分野に分類されていた。「固い」は固体地球、「軟らかい」は大気、海洋などを研究対象にする。「もつと軟らかい」には説明が必要だろう。

地上五〇キロまでの地球表層大気（対流圏と成層圏）よりもさらに上部にある希薄大気空間の諸現象を研究する超高層大気物理学が、「もつと軟らかい」地物である。例えば、太陽風（電子とイオンが混在するプラズマ流）が地球磁気圏に襲来して発生するオーロラは研究対象の一つである。地球の直径は約一万三千キロ、磁気圏と宇宙空間の境界は地上約一〇万キロである。豆知識を加えると、国際宇宙ステーションは四〇〇キロ、偵察衛星は一五〇〇^キ、測地（GPS）衛星は二万キロ、静止衛星（放送通信衛星）は三万六千キロの上空を周回している。

「もつと軟らかい」地物の隣接領域は天文学である。当時の私の感触（あくまでも個人的な感想です）では、就職をあまり考えていない↓就職先がありそう、数学・物理学がものすごくできる↓そうでもない、は連動しており、天文学↓「もつと軟らかい」↓「軟らかい」↓「固い」、の順であった。同級生たちを見ていて、ものすごく数学や物

理学ができて尊敬していたのは天文学や理論物理学の学生たちだった。

以上、地物について長々と説明した。私のような地物専攻学生が世界を認識する際に用いていた認識枠組を理解していただきたいからである。

自然科学は、自然現象を数量化して可能な限り数式、方程式などを用いて記述していく。定性的な議論（ストーリー）は必要だが、定量的に示さなければ学問にならない。そこでは、合理的で活動的な主体と意志のない静的な客体という二元論が、堅固な構図として前提されてる。

そんな当たり前のことをわざわざ強調するとはどうかしっている。そう思いの方もいらっしやるに違いない。主客二元論は疑いの余地はない。しかし、こう考えること自体が、フッサールが言うところの「自然的態度」である。

理学部の物理系の学生にとって、量子力学や統計力学などは必修単位であった。学科の垣根を越えて大教室（と言っても百人くらいの収容人数）で学ぶことになっていた。量子力学の講義はとても難しかったが、とても楽しかった。決して崩れることのない常識、すなわち主客二元論が少しずつ揺らいでいくのであった。

被災地で見えるもの

木元 健二

(新聞記者)

天井の高い避難所は夜、どんなに冷え込むだろう。発生から二カ月たっても上下水道などインフラが復旧していない。連日、報じられている能登半島地震のニュース。背景に映る寒々とした空気が、大地震の爪痕を示している。

あのときもそうだった。真冬だった。一九九五年一月十七日午前五時四十六分、阪神淡路大震災が起きた。当時、私は入社して九カ月の新人記者である。

発生から数日後、淡路島・北淡町に入った。翌二月にかけて島で取材を続け、その後、阪神間や神戸へと転じた。ふだんは新人として絞られっぱなし。怒鳴られまいと、小さくなっていた。それが被災地では、目にする光景がニュースに直結した。私にしてみればあれこれ言い訳を考えるひまもなく行動を迫られる、初めての現場でもあった。

発生から一カ月ほどたち、淡路島の倒れた家々から人々

が何かを抱えるように持ち出してゆく。がれきの撤去日が近づくにつれ、そんな姿が目立つように。

「がれきから何を持ち出しますか」

繰り返し問いかけ、同僚と手分けして記事にまとめた。

「風呂桶のかけら」

ふと聞いた答えが忘れられない。そのおじさんはやせて、パンチパーマをかけていた。こわもての印象だが、思い切って話しかけてみると、優しくかった。五十三歳。二歳と十一カ月の孫二人を亡くしたという。

建設現場などで働きに働き、ようやくゆとりができ、孫を授かった。大好きなパチンコもやめてしまい、近くに住む幼子二人と毎日一緒に夕食をとった。

「風呂に入れてやるのが生きがいだっただよ」

風呂おけのかけら、という他人には価値がないものを宝物と想う。そう明かす口調はからりとしていたが、どれほど無念が胸に詰まっていたのか。人生の実り、失った実り。そのどちらも伝えたい、と私は夢中で原稿を書いた。

記者になり、最初の十年は阪神淡路大震災に遭った人々に逢い、折にふれ、記事にまとめた。

後年、淡路島のおじさんの奥さんにも取材した。夫婦二人とも北国出身だが、大阪万博が開かれていた七〇年七

月、淡路島に移り住んだという。

震災で梁の下敷きになり、やがて危篤状態に陥った。「目の先に、一本道が続いていて、お花畑のようなものが、ぼやーっと見えた。そっちに行こうとするんだけど、足元が真っ暗で、どうしても前に行けなかった」。そう振り返り、亡くなった孫二人が足元を暗くして止めてくれたのだろう、と信じていた。

拙稿が広島の中學で教材に取り上げられたこともあった。記事に登場した若者に向け、三年生が手紙をしたためた。国語担当の河田優子教諭（当時）が新聞を使って授業をされていたのだ。

震災で家族を失った人が、それぞれの心情を手紙形式で伝える連載。若者はその初回に登場した。小学五年生のと き神戸市東灘区で被災し、父母と祖母、弟を失った。兄とともに母の故郷、兵庫県豊岡市で育てられ、十年になる。

「社会人1年生になりました。健康に過ごせていることがせめてもの恩返しです」「僕とお兄ちゃん、姿形は変わっても、家族への思いは変わりません」……そして、初めてのボーナスで（育ててくれた）おじさんとおばさんにセーターを贈ったことなどを明かしてくれた。

ずっと部数が減り続けているものの、勤め先の新聞社は数百万部を発行し、デジタル版もある。ただ、自分の記事が全国発信されても、反応が寄せられることはないに等しい。どんな風に読まれているのか、実感できないのだ。だから中学生から手紙をいただいた時は、特別な思いだった。確かに読まれ、何かを感じてもらえたと思えた。その後、私は広島まで行き、長い続報を書いた。

河田先生からは今も、お便りをいただく。三年前、広島の隣の島根県で働くことになり、時折、広島向けの紙面でも拙稿が扱われる。よく読まれたうへの、心のこもった文面は私にとつての宝物である。

新聞社に入り、茫々三十年。不出来ながら「デスク」という監修役も担い、労組の専従にも出たが、多くは原稿を書いてきた。ただ、目立つ役回りとは無縁だった。生来、頭の回転が鈍いうえに怠け癖のあるポンコツである。「特ダネを放つ」という記者本来の能力など、まったく備わっていないからだろう。

ただ追っかけてきたのは、震災の被災地で見えてきた、一度きりの人生の、巧まざる模様だった気がする。AIの魔の手も、まだそこまでは伸びてこない。

The Changing Same

松田 裕史

(高校教員)

という言葉をNHK-FMのラジオ番組、「松尾潔のメロウな夜」から何度となく聞いてきた。いつしか、それは言葉の護符のように僕のエデュケーション・実践の軸の一つになっていた。その通称、「メロ夜」が三月をもって終了することになったというニュースをウェブで目にしたときは自分の目を疑った。十四年続いている長寿番組。最初の数年はたまに聴く程度であったが、ここ十年ぐらいはほとんど欠かさず聴いてきた。聴くと言っても、月曜夜十一時開始。この時間はすでに深い眠りに入っているので録音したものを後日聴くことにしていた。番組のHPには「R&Bの研究家としても知られる松尾氏が、大人が楽しめるスイートでメロウな音楽をセレクトしてお届けします。」と紹介してある。もともと音楽ライターとして出発した松尾氏は音楽プロデューサーも手掛けるようになり、EXILE、平井堅、ケミストリー、JUJUなどをプロデューサーしている。何より

言葉の人。番組内で松尾氏が使用する語彙、物の見方、語り口など、大いに参考にしてきた。単なるエンタメ番組ではなく、学びのあるラジオ番組だった。ニュースに、打ち切り、という言葉もあったことから松尾氏が望んでいたのではないのだろう。残念でならない。

二月二日の放送は番組終了のニュースを知った後に聞いた。その中で流された曲のいくつかは何かの終わりと呼応するようだった。「星たちの距離」(堂珍嘉邦、KEIKO LEE)、「Best Part」(Daneil Caesar, H.E.R.)、「Keeps On Fallin、」(Babyface, Ella Mai)、「My Boo」(Usher, Alicia Keys)などはなぜだか分からないが悲しみを増幅させる。理由を言葉にできるかもしれないがそれも今はしたくはない。

番組にはリクエストメッセージを数回送ったことがあるが放送で取り上げられたことはない。リスナーの多くは音楽に対する造詣が深く、選ばれたリスナーメッセージの内容は長年、R&Bを愛好していることが言葉の端々から感じられる実にレベルの高いものがほとんど。僕の浅薄なメッセージが選ばれようもないが、最後にもう一度送ってみようと思う。

昨秋、ジャニーズの性加害問題をめぐって松尾氏と山下達郎氏との間でのやり取りが話題になった。このやり取り

りを苦い思いで見つめていたのは僕だけではないだろう。音楽に対する二人のスタンスの違いがはっきりと表れたと言えるかもしれない。山下氏は音楽とその作者を切り離す。松尾氏は音楽そのものだけでなく、それを作った作者を音楽に重ね合わせ物語を創出する。このスタンスの違いは文学批評でも古くからある。ヤマタツの曲には昨秋以来すっかり遠ざかっている。それが僕の答えと言えば答えである。

The Changing Sameを「変わりゆく変わらないもの」と松尾氏は日本語で言い換えている。別の言葉で言えば不易流行になるだろうか。変わることに変わらないこと、この二つとどう折り合いをつけなければならないのか。変化し続ける現実に対して自分も変わり続けること、変わらないでいること、どちらのオプションを取ればいいのか。ただ変わればいいのか。それは変節にはならないのか。答えがはっきりしていることもある。していないこともある。教育については白黒はつきりさせるのではなく、「変わりゆく変わらないもの」という二律背反的なコンセプトがなじむ場合が確かにある。

数年前、松尾氏は『永遠の仮眠』という小説を上梓された。実はこの本が出版直後、定有堂で売られているのを見たことがある。その時はなぜか買わなかった。おそらく読むタイミングではなかったのだろう。しかし、買っておけ

ばよかったのにと少しだけ後悔もある。いつかどこかで、もう一度出会えればと願う。

松尾氏が三月の最終番組で最後に流す曲、寝酒ソングは何になるだろうか。松尾氏のプロデュース作品Ella Maeの「Boo, d Up」のいずれかになるだろうと僕は予想する。その中でも、松尾氏が屋号としているNever Too Muchが最有力だろうが、予想を裏切られるのもまた楽しい。ただ、僕が最後にリクエストするのはこれらの曲以外をあえてしてみた。それは松尾氏のプロデュース作品の一つで、番組でも何度となくかかった曲、「Winds」（作詞・松尾潔作曲・久保田利伸）。ファンクネスとメロウネスの「成分」を融合させた久保田のファルセットボイスで次のようなフレーズを今一度聴いてみたい。「Winds blow 果てしない想い 道標ない旅 憶えてるよ そのぬくもりも あまい日々の影法師 記憶は消えない」そういえば、「成分」という言葉の使い方も番組で学んだ。いつものように、いつものフレーズで番組は終わるのだろう。

「この番組が応援しているのは、あなたです。」

本を作る側から (12)

村瀬 謙介

(小取舎)

コンビニエンスストアが鳥取市にいつ出来たのか覚えていない。高校生の時にはなかったような気がする。親戚が寿町でよろずやをしていたり、本通りのポレールはあつたが二四時間営業ではなかったので、ひよつとすると高校卒業後、大阪に出た時に初めてコンビニに入店したのかもしれない。

書籍も好きだが、雑誌が好物だった私はコンビニでもよく雑誌を購入していた。主にファッション誌やローカル誌(kansai一週間や関西ウォーカーなどで、ファストフードならぬファストブックは躊躇なくコンビニで済ませていた。

コンビニが出来た当時、コンビニは外から見て明るく見えるように蛍光灯が道路と平行に並んで設置されているとか、客の動線が入り口から反時計回りになるように商品が陳列されているなどいろんな工夫がテレビで紹介されていた。

たのを記憶している。外から見てお客が入って賑わっているように見えるために窓際に本・雑誌コーナーが置かれているとも紹介されていた。コンビニからしてみれば「さくら」にもなるので立ち読み大歓迎ということだ。

鳥取に帰ってきてから二〇年近く経つがコンビニは今でも当たり前によく使う。ちよつとしたものを買う時に寄ったり、支払いや、それこそ本を送るレターパックを買ったりするのに活用している。

鳥取市でも近年多くのコンビニが出来た。鳥取市におけるコンビニエンスストアの数は、書店よりも圧倒的に多く、市民の日常生活に欠かせない存在となっている。書店さんだけではないが、地元の経営者は、コンビニエンスストアやオンライン販売の台頭により、競争が激しくなっていると語っていたが、消費者の感覚的にいうとそんなにコンビニは最強ではない。価格も高めだし、ここできちか買えないというものは基本ない。だからこそコンビニ企業も自社レーベルを作つてここできちか買えない特別感を作つて対抗しているのだが。

しかしふと思う。買い物のついでに立ち読みこそする

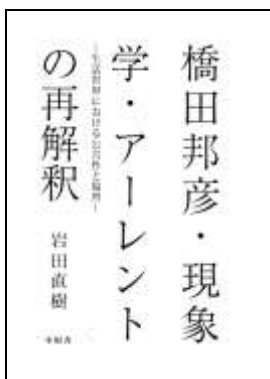
ものの、コンビニで雑誌を買ったことが最近ない。

大手チェーンのローソンとファミリーマートに雑誌や書籍を配送する日本出版販売（日販）が来年二〇二五年二月を目処にコンビニへの配送をやめるといふ。現在、日販は全国のローソンとファミリーマート、合わせて約三万店舗の配送を担っている。その後はセブンイレブンに配送している同じく大手取次のトーハンが引き継ぐというのだが、輸送燃料や人件費の高騰や、以前音信不通で書いた輸送問題のこともあるので、これまでの配送に三万店も加えたコンビニへの配送が可能なのか疑問である。当然、コンビニでの雑誌コーナーがなくなる可能性が浮上している。

コンビニが書籍の取り扱いをしなくなることは、地方の書店の代わりとしての役割を果たしてきたコンビニエンスストアの在り方に大きな影響を与え、地域の人々が本を手に入れる手段が制限される可能性がある。私自身がコンビニで本や雑誌を買わなくなったから別にコンビニに雑誌コーナーはなくても良いというものではない。交通手段が限られている鳥取のような地方（特に県内でも書店がない地域）では、書籍を入手する手間が増えることで、読書離れが進む懸念もある。この変化が地方の書店に与える影響

は大きい。小規模出版社としても震える事態である。地域の文化や生活基盤を考える上で、この問題に対する適切な対策が求められている。

鳥取市におけるコンビニと書店、そして図書館など読書の風景は多様であり、amazon や電子書籍も加えた時代の変化に対応しながら、それぞれの役割を果たしている。市民のニーズに合った多様な選択肢が提供されることで、より豊かな読書体験が実現されることが必要である。



岩田直樹『橋田邦彦・現象学・アーレントの再解釈
— 生活世界における公共性と倫理 —』小取舎 2023

一八〇〇円本体

汽水のほとりから (36)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、ロシアの反政府活動家ナワリヌイ氏の獄死の報に接した。早速ウクライナのゼレンスキー大統領はブーチン政権による暗殺だと非難したようだが、そもそも国家とは、かつての日本がそうだったように、自国の国民を獄につなぐことも辞さない権力機構である。故に国民はこれを憲法で縛る必要があるわけだが、私はむしろこうした事実を見聞する度にアナキズムに憧れてしまう。また、国家とは暴力を独占しようとする権力機構でもある。発足当時の自衛隊が警察予備隊と称したように、軍隊と同様、警察もまた国家の暴力装置である。それは沖縄の基地建設反対の現場を見れば明らかだろう。時に軍隊や警察は暴走する。先の戦争で明白になったその事実を我々は忘れつつある。

アナキズム思想研究家の森元斎の新作『死なないための暴力論』(集英社インターナショナル新書)が組織的な権力の暴力に対抗するための「反暴力の暴力」の是非を論じ

ている。近代の法治国家において個人の暴力の行使は犯罪行為であり、許されていない。かつて評論家の呉智英は「死刑を廃止して仇討ちを復活!」と書いたが、それは近代国家が暴力を独占していることへの問題提起だった(死刑制度も国家の暴力装置である)。封建時代、前近代とバカにすることなかれ、仇討ちを美德とした江戸時代の方が近代よりも個人の権利を認めていたというのである。

この点、米国は今もユニークである。個人の銃の保持が権利として認められているからだ。周知のように、これは建国の歴史と関係がある。米国の建国は一八世紀末だが、それ以前は英国の植民地だった。建国に関わった人々は、英国でほぼ一世紀前の一六八九年に制定された権利章典で認められた「市民の武装権」と同じものを自らの憲法に規定したとされる。具体的に言えば、「規律ある民兵は、自由な国家の安全にとって必要であるから、人民が武器を保有した携帯する権利は、これを侵害してはならない」などと訳される修正第2条がそれで、これは銃規制の問題が取り沙汰される度に必ず言及される有名な条文である。

最近出た中野博文『暴力とポピュリズムのアメリカ史』(岩波新書)によれば、この条文で「民兵」と訳されるのは原文の「Militia(ミリシア)」で、これはヨーロッパに古くから伝わる軍隊のかたちだという。米国で個人の

銃の保持が権利として認められているのは、本来はミリシアという民間人の軍隊を組織するのに必要だったからである。米國が英國政府からの独立革命によって建国したことを思えば、歴史上ミリシアは革命軍であつたことになる。

一九世紀になると、ミリシアは政府と戦う市民の軍隊としての性格を失い、正規軍との一体化が進んだ。が、その一方で、自分たちこそ人民の意思を體現する者だと名乗る者たちによって、それは様々な反乱の母体となつてきた。現在でも極右の民間人が創設した武装団体がミリシアの名で活動しているという。こうした現状から、ミリシアは米國社会に顕著なポピュリズム（政治変革を目指す勢力が既成の権力やエリート層を批判することによって、人々に訴える運動）ともつながっている、と中野は書いている。

暴力の行使は、当然その全てが許されるわけではない。が、ミリシアがそうであつたように、権力に抵抗するためには暴力を行使する人々は歴史上普通に存在したのである。日本でも、武士とは本来そうした存在だろう。自らの土地を守る自衛集団であり、朝廷の莊園制度などに抵抗した。それは「國家に抗する社会」（P・クラストル）であり、地方の独立コミュニティである。が、幕府は彼らを利用して新たに國家を作つた。結果、武士は地方官僚となつたが、その本質は仁義を重んじる任侠的な存在である。江戸時代

に仇討ちが美德として認められたのもそれで説明がつく。 - 15 -

ところで、仇討ちとは、自力で罪を償わせることだつた。が、近代に至つて我々はその難事業を警察や裁判所などの権力機構にゆだねてしまったと言える。これは或る意味で資本主義がもたらした構造とよく似ている。衣・食・住に必要なモノを自力で收穫する努力を惜しみ、それを資本が牛耳る市場という名の権力機構にゆだねてしまったからだ。結果、我々は生きるのに必要な收穫という行為に伴う暴力（食は特にそうだ）を自身から消し去つてしまった。

DIYという言葉がある。Do It Your selfの略語で、資本主義に対抗するための自前の衣・食・住を意味するが、我々は自前の暴力というものについても考えてみるべきだろう。山上徹也のように銃を造つてテロを起こせというのではない。國家であれ、資本であれ、権力機構によつて殺されそうになつた時、それに抵抗できる自前の「力」は持つべきだと言ふのだ。森元齋の説く「反暴力の暴力」は、仁義の如き、よりよく生きるための倫理的な「力」である。人はそれを必要としてきたし、これからもするであらう。

プーチンの「大ロシア・パン」

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

ロシアによるウクライナ侵攻が始まって、気が付けばもう丸二年が経ってしまった。

のっけからこんな話で恐縮だが、われわれの世代は生まれた時あの国は「ソ連」で、「ロシア」といえば、高校の学生食堂の売店で売っていた「ロシア・パン」を思い出す。とにかくデカイパンだった。

命名の由来は知らないが、当時、学食のカレーは百五十円、うどんは八十円に対し、ロシア・パンは六十円。親には「カレーを食べる」と言って金をもらい、巨大なロシア・パンと水道水でしのいでいた。浮いたカネを何に使ったかは、恥ずかしくて誰にも言えない。

クオリティはともかく、「大きいことはいいことだ」(昔そんなチョコのCMがあった)というパンのせいかな、「ロ

シア」にはそんなイメージが重なるが、このネーミング、あながち間違いとはいえない。ヤマザキにはさらに巨大な「大ロシア」というパンもあった。

ソ連が崩壊後も、ロシアは「世界一広い国土」に変わりはない。日本の45倍。にもかかわらず、この国は拡張主義、領土欲が並ではないのだ。

ウクライナのほかグルジア、モルドバなど、かつて同邦だった領土を侵食。第二次大戦後にドイツから分捕ったケーニヒスベルク(ワグナーの生地)は、バルト三国の独立で飛び地になったが、「カリニングラード」と名付けて全く返す気はない。日本の北方四島もしかり。

「大ロシア主義」。レーニンは民族自決を唱えて連邦国家でこれに抗したが、スターリンはあっさりツァーリ(皇帝)と同じ道を歩んだ。プーチンもこの妄想に取りつかれている。このDNAは根深い。そういえばトルストイにこんな短編小説があった。

その名も、『人はどれだけの土地がいるか』(1886年、岩波文庫「トルストイ民話集イワンのほか」収録)。ある農民に「夜明けから日没まで、歩いた分だけの土地を格安でお前にやろう」という話が転がり込んだ。「少しでも多くの土地を」と欲にかられた農民は倒れるまで歩き、

手に入れたのは彼が埋葬されたわずか6フィートほどの土地だった、という寓話。

まあ、「欲深な人間は自滅する」という子供向けの道德的寓話と解釈されがちだが、この頃、ロシアはクリミア戦争、露土戦争など領土拡張（南下政策）の戦争をたびたび起こし、国内では開明君主だったはずのアレクサンドル2世が圧政者に転じて、寓話が書かれる5年前、弾圧されたナロードニキ（人民派）の若者らに暗殺されている。

領土戦争や強権政治の先に待つのは「6フィートほどの墓穴のみ」。政府批判などできなかった時代、この寓話には反戦の思想があつたトルストイの「暗喩」が込められている気がしてならない。

◇ ◇ ◇

それにしても、ウクライナの戦況には心が痛む。

先日、TVのワイドショーに東郷和彦氏が久々に出演していた。「ムネオハウス」など鈴木宗男の一連の事件で更迭された元外交官で、ロシア寄りと言われる。

彼は、トランプ派の米国キャスターのインタビュアーにブーチンが「当初から停戦を考えていた。相手が乗らなかつただけ」と答えたのを引用して、「ブーチンもこう言っている。命を救うためには、とにかく停戦が急務だ」とまくし立てたが、珍しくデИБ・スペクターが気色ばんで「それ

を決めるのはあなたでなく、侵攻されているウクライナの人たちでしょ」とかみついた。いいぞ、デИБー！

「人の命が何より」。潮目が変わると必ずこれを持ちだす人間がいる。「人命第一」は誰もが反論しにくい。そして「ウクライナ側にも譲歩がある」と本来守るべき相手に迫る。私は東郷氏から、大戦前に英国首相だったチェンバレンを連想した。

チェンバレンはナチスと宥和的な協定を結んで戦争を回避し、一時称賛を浴びたが、「あのヒットラーが協定を守るはずがない」。反論したのがチャーチルだった。

◇ ◇ ◇

動員兵の母たちの会で、ブーチンは「交通事故死も毎年3万人、人はいつかは死ぬ」と言い放った。

ソ連崩壊の引き金となったアフガン侵攻の兵士の死傷者は5万人、ウクライナ侵攻でロシアはすでにその6倍、30万人もの死傷者を出している。「ブーチンの大口シア・パン」がどんな結末を迎えるのか、しばらくは目が離せない。

東風吹かば…

ムラカミヒロミ

(フライング・ブックマン)

ある時、

「トラクターの写真集、ないですか？」

と言ってきた生徒がいた。農家の一人息子だった。

商売柄、建機や重機の写真集はあったが、農業機械科がなくなつて半世紀も経っている。大きな図書館を探してみたら、農機の教科書にモノクロで数枚載っている程度だった。そもそも、写真集自体、出ていなかった。

その本を渡して、「この位だねえ。」が結論となった。

無理を承知で洋書を調べてみた。ありましたねえ、さすがにお国柄と申すべきか、アメリカとドイツで結構な数が出ていた。安ければ自腹で買つても、と思つたが、なかなかのお値段だったので断念した。

ある時、

「ナマハゲになりたい。」

と言つてきた生徒がいた。何かの比喩か、謎掛けか、コ

スプレか、と訝つて尋ねてみると、正真正銘、秋田のナマハゲになりたい、と言うのだった。どこまで本気なのか分からない。

「地元の人じゃないと、難しいだろうなあ。」と回答。念の為、秋田県の観光協会を調べてみると、ナマハゲ伝道士認定試験というのはあった。体験コースのようなものはない。本気なら、この辺りを突破口に、地元で運動する方法もあるだろうが、ただの現実逃避か、その場限りの思いつきのようにも感じたので、そこまでは伝えなかった。そもそも職業にはなるまいよ。

ある時、

「この訳、ある？」

国語総合の「四面楚歌」の所を示しながら、生徒がやってきた。「史記」の本紀である。今も、同じ教材使つてるのかよ、と自分の高校時代を思い出しながら、明治書院の「漢文大系」の一冊を引っ張り出し、

「項羽と劉邦、項羽と劉邦…」

と唱えながら、該当箇所を開く。

「ホラ、ここに書き下し文と現代語訳が載つてる」と渡してやる。生徒は驚いたような顔をして、

「何で、すぐ分かるん？」

「高校で教わったからね」

若い時の学習は大事なのよ。

ある時、生徒（珍しく女子）がやってきて、

「BL小説、ない？」と言った。

「ない」と答えるのは簡単だが、それじゃ愛想なしの上、職業倫理にも悖るから、文庫の棚に案内して、

「オスカー・ワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』は面白いよ。トーマス・マンの『ベニスに死す』は、どう？ ジュネは…ないわな。『キタ・セクスアリス』はちよっと敷居が高い。あ、そうそう、森茉莉の『恋人たちの森』は気に入るんじゃないかな」

彼らは総じて、外国文学を読まない。

気に入ったらしく、後日、『甘い蜜の部屋』も借りて行った。そいつは、少し違うんだけどね、ま、いいか。

また、ある時、生徒（男子である）が、某男性アイドルの写真集が借りたい、と言ってきた。

「母さんが読みたいって」

学校図書館と言うのは、結構穴場で、村上春樹のようなベストセラー本は、リクエストもあるので大抵購入しているが、一人か二人借りたら、後は滅多に動かない。賢い利

用者は、子供の通っている学校から借りて来させる。

しかし、これはちよつと無理がありましたね。

少し前、教職員の校内研修会があつて、LGBTについて聞いたばかりだった。講師は言った。「うちの学校に該当生徒はいない、と考えてはいけません。LGBTの人口比は約五パーセント、七百名規模の学校なら、一クラス丸々くらいは、いるということです。いないのではなく、気付いていないだけです」

公立図書館にも、芸能人の写真集は滅多にないので、「TVガイド」のバックナンバーで我慢してもらった。

レスリー・キーの写真集が見たい、と言ってきた生徒もいた。洋書で高額な上に、入手ルートも代理店一択だったので、たぶん無理だと思うけど、と予防線を張りつつ、大きな図書館にリクエストしてみた。案の定、駄目だったが。

学校を離れて早や十有余年。この季節になると、あれやこれやと思ひ出す。彼らも、そろそろ三十代。幸せに暮らしているだろうか。

鳥取あれこれ その九十一

内田 克彦（地域研究家）

昨年九月、女性文学の専門家である尾形明子の著作『女の世界』——大正という時代』が発刊された。『女の世界』は一九一五（大正四）年の創刊以来、女性作家の小説を掲載していた雑誌である。これらの女性作家のうち、「文学史に残る作家」として、当然のことながら加藤みどりなどを取り上げているが、「大半は消えてしまった作家たちである」と記述していた。

この著には、『女の世界』が編集した「大正婦人録」（一九二〇年二月現在）を復刻して載せており、一人ひとり鳥取ゆかりの人物を探したところ、次の女性たちがいた。

まず、「池山薫子」。元『家庭の花』『婦人タイムス』を編輯せし事あり、目下『短歌と詩』の主幹にしてその経営に当る西伯郡逢坂村に生る、とある。

次いで、「高砂松子」。本名は稲垣壽子、一九〇一年、倉吉町に生る。鳥取女学校出身。現住所、宝塚少女歌劇団内、とある。

さらに、田中孤夜子の名もあつた。そのまま引用する。

歌人明治三十年三月三日、鳥取県気高郡正條村勝見に生る。大正四年の秋山陰日々新聞に記者たりし時、『大典記念行進曲』を作り、県人之を歌ふ。歌集『錦海のほとり』『灯ともし頃』の著あり、一女あり、本年三歳。現住所 鳥取県浜村駅前。

彼女の年譜にはない事項があり、この記述をヒントにもつと調べる必要がある。尾形著には、巻頭に作者の顔写真を掲げる『女の世界』の一例として、「情話『顔世御前』の筆者長谷川時雨女史」の顔写真と並んで、驚くことに、「小説『かゝり合ひ』の作者安治孤夜子女史」の顔写真を載せていた。初婚姓の「安治」で作品を発表し、「大正婦人録」の時点では、「田中」姓に戻していたのだらう。

念のため、「国立国会図書館デジタルコレクション」で「安治孤夜子」を検索すると、他雑誌への広告掲載から、『女の世界』の、一九一六年二月一日号に「秋と恋ぐめ」、一七年二月一日号には「妻君大勝利」を載せているようだ。これらの作品は田中古代子の年譜には一切挙がっておらず、未見である。何としても入手したいものである。

このほか、「鈴木秋子」が挙がっていた。引用する。

さむしろと号す。明治十九年十一月三日、鳥取市吉方町に生る。東京女学館、国語伝習所を卒業す。『折檻』『暗夜』『奇抜病』『情力』等の小説の著あり。嘗て正岡藝陽氏夫人たりき。現住所、下谷区根岸笹の雪横町。

また、「正岡芸陽」を検索すると、ウィキペディアで立項されている人物であった。『明治文学全集84 明治社会主義文学集(一)』（筑摩書房）に、詳しい年譜が載るとともに、「嗚呼売淫國」（一九〇一年）「人道之戦士（田中正造）」（一九〇二年）の作品が掲載されていた。正岡は、一八八一（明治一四）年広島県に生まれている。「解題」（小田切進）に「藝陽は社会主義者ではないが〔略〕痛烈な批判によって、社会主義的な評論家・ジャーナリストと目された一時期があった」とあった。

さて、「国立国会図書館デジタルコレクション」で「鈴木秋子」を検索すると、四〇三件が検索された。

『家庭小説第二編』（明治三四年、東洋社）、『家庭小説第三編』（明治三五年、東洋社）、『評釈女子文範』（明治三五年、東洋社）、『軍国の婦人』（明治三七年、日高有隣堂）があり、かなりの出版数である

このため、『婦人と文学』（明治三八年）の「明治の21- 閨秀作家」の中で、樋口一葉などを取り上げた後に、「尚小金井喜美子、三宅花圃等の才媛あり、亦鈴木さむしろ女史の如き新進作家あれども、今日諸氏を論ずることは、未来を有する諸氏に対する礼に非ず、寧ろ静に今後傑作の出づるを待つに若かざるなり。」と書かれているのだろう。

続いて、正岡秋子の名で『女子の見たる女子の本性』（明治三八年、嵩山房）、『折れ檻』（明治四〇年、也奈義書房）を出版している。さらに「奇抜病」（明治四三年、文藝倶楽部）「暗い世」（明治四四年、文藝倶楽部）がある。ところが、塩田良平『明治文学史』（一九五五年、慶応義塾大学通信教育部）では、「その他、自然主義系の作家」として、國木田治子、素木しづ子、永代美知代、「正岡藝陽の妻正岡秋子等の短篇作家もをりますが、これ等の人は結局自然主義作家としても完成せず、次代への発展もなく作家行動を中絶してしましました。」とあった。

吉野鉄拳禅『現代女の解剖』（大正四年、東華堂）の「閨秀小説家論」の中で「一時名を売りとる正岡秋子、竹内政女の忘れられたるは現時甚だ振はざれば也」とある。結局この頃には既に過去の作家となりつつあったのだろうか。

八代日記

(四十六)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

二月某日

福岡県田川市にてライブ。午前中は出勤せねばならず、いちど八代に南下して労働。何とかある程度片付けて、残りには人に託し、昼過ぎに八代を出て田川に向かう。

早起きしたので運転中に眠すぎて妻に電話。雑談をしていたら何とか目が覚めてきた。高速を降りてから山を抜ける感じの下道を走る。北九州ナンバーのクラウンが後ろから来ていて、少しおっかなかった。2時間40分ほどで田川に到着。

現場近くに車を停めて、ダイヤモンドムーンというライブハウスに歩く。入り口に悪そうな人たちがたむろしている。「こんにちは」と挨拶したが、返事してくれたのは前回福岡市にて共演したDJの上田さんだけだった。やさぐれ方が皆とてもいい感じで興奮した。

会場に入ってPAと思しき方にも挨拶したがまたうまくいかなかった。俺の「こんにちは」の言い方が悪いのかも知

れない。もしくは僕の出立があまりにもサラリーマンくなく、なぜここにと訝しんでいたのかも知れない。メンバー到着までチューニングしたり缶コーヒを飲んだりして待つ。

メンバー到着後に主催のテツさんも来て和む。PAさんもととてもいい調子でリハーサルの音響をやってくださり、だんだんと打ち解けてきたような気がする。田川は炭鉱街だったとのことで、いい意味での不良が多い街だと聞く。みな怖そうだけど、笑顔が清々しいし、ベタベタしない感じがとても良いなと思った。

最初の出番がテツさんのバンド、クロトワ。テツさんのアコギと上田さんのマウンテンダルシマー、もう一人がエレクトリックアップライトベースのインストバンド。普段面白いことばかり言おうとするテツさんのシリアスな演奏は素晴らしい。この3つの楽器の編成も素晴らしい、どこにもないアンサンブルだった。上田さんの演奏には迷いがなく懂れた。自分らの演奏は、どうだったか忘れてしまった。その前に出たオオクボTさんの印象が強すぎたせいだと思う。

打ち上げに「土筆」というスナックに連れて行ってもらった。なんとジュークボックスが置いてあり、7インチを皆で聴きまくる。僕と杉浦はビートルズの「ユー・ノウ・マイ

ネーム」が気になって仕方なく、やっと聴ける順番が回ってきた時は興奮して踊った。

その後、泊めてもらいに行ったテツさんの家が凄すぎた。凄すぎて上手く書けない。家の裏山にお父様の作った庭があり、真ん中に「絆」と書いた大きな石が据えられていた、とだけ記しておく。

翌朝、テツさんおすすめのうどん屋に連れて行ってもらう。田川の面々の心のように透き通った出汁が優しすぎて染み渡る。寄った韓国雑貨屋のキムチを買って帰ったが、美味すぎた。またそれだけ買いに行きたいくらい。田川大好きになりました。

二月某日

田川の翌日は熊本にてライブ。熊本は住んでいるにも関わらずあんまり友人もおらず、何度も演奏したことがあるわけでもないで雰囲気としては少しアウェイ。しかし、ブッキング兼PAのジュン君が奔走してくれ、充実の対バンで盛り上げてくれた。特に若者たちのバンドは演奏がうま過ぎる。うまい上にバンドの音像が完成されていて、自分らの出音が少し恥ずかしい。

初っ端のサマリー氏はドイサイエンスというバンドの主催者。彼の弾き語りがとっつきやすいのと狂ってるのがま

ざくりあって素晴らしかった。

熊本では演奏ミスへの強迫観念が他所で演奏するより強い。(いいかつこいいいなだけだと分析している)が、今回は開き直って演奏してみた。結構良かった気がした。サマリー氏とジュン君に終演後ほめてもらったので、良かったのだろう。録音を聞き直しても悪くなかった。ついに地元での何だかを克服できたような気がする。

二月某日

名古屋のブラジルコーヒーにて「ケバブ冬のジョンソン祭り2024」。名古屋ツーデイズ。初日がワンマンライブ、二日目がピラミッドと、フランスからのmanuel bienvenu bandとの共演だった。ブラジルコーヒーのボス、ピラミッドのメンバーでもある角田さんの企画。昼頃名古屋について、和菓子屋チェックと後はひたすらゲームして入り時間まで時間をつぶす。

ワンマンの前座にムルヒバンド。会場を温めてもらう。我々はツーセットにして、計25曲演奏した。熊本の演奏の調子よさを維持し、中弛みなく演奏し切ったと思われる。熊本や東京よりもホーム感。なぐあ氏によるオープニングからクロージングまでの選曲を最高であった。

つづく。

晴れの国へ、理想の教育を探しに

ハイテックハイ視察記

三浦 永理 (青翔開智中学教員)

晴れの国と聞いていたはずだった。カリフォルニアのロサンゼルスに着くと、雨で、年に数回しかない雨の日が続き、「unusual」な天気らしい。豪雨ではないが、ロサンゼルスが混乱するには十分な雨のようだった。

それが、私にとって初めてのアメリカでの一日だった。

私が初めてのアメリカへ、カリフォルニアに向かった理由は、ハイテックハイ(以下「EH」と呼ばれる学校視察ツアーへ参加するため。EHは、カリフォルニアの中でも、メキシコに近いサンディエゴにある。2000年代初頭、まずはひとつの高校として始まった学校だが、小学校中学校が開かれ、他にもキャンパスができ、現在は十六の学校からなっている。この学校が日本の教育者の中で知られるようになったきっかけのひとつは、ドキュメンタリー映画『Most Likely to Succeed』だろう。この学校は、プロジェクト型学習に徹底して取り組んでいることで、世界中から視察がやってくる。

プロジェクト型学習、いわゆる「PBL」は教育の手法で、生徒は、机上で学ぶばかりでなく、何かの製作に取り組み、学びを深める。EHでは、それを一部の教科でやるのではなく、一学年を人文系・科学系両方の教員が担当し、彼らが作成した教科を横断したプロジェクトを行う。

今回見学した授業は、十二年生つまり最終学年の『Onion Tatoes』という授業で、食がテーマだ。生徒たちは、英語(つまり国語)を担当する教員とは記事を読みながらディスカッションをしたり、科学を担当する教員からは栄養の知識を学んだりしながら、自分たちにとつての「wellness(健康)」を考えていく。そして、この二人の教員に共通するのは、木工をこよなく愛しているということだ。生徒が制作するのは、まず最初は近隣の小学校に向けたプランターで、その次に個々人が箱を製作し、最終的な成果物として台所用品を製作する。これを最後の発表会で展示し販売する。教室は晴天の外とつながり、木工所のような。いわゆる普通の教室とは景色が違う。

実際に見学に行つて生徒と話すと、それぞれがどんなプロジェクトで、何を製作しているか熱く語ってくれる。そこで、いじわるな質問もしてみた。「つまらなかったプロジェクトは?」「EHの悪い部分はある?」そんな質問

にも生徒は率直に答えてくれる。中にはプロジェクトを通した学びへの苦手意識や、知識不足への懸念などを語る生徒もいた。

「E」は公立の学校であり、生徒は抽選で入ってくる。お行儀のいい子ばかりではない。加えて、メキシコに近いために、スペイン語が母語という生徒もいる。例えば、ゲストスピーカーが来た時も、だらけている生徒もいる。授業の作業中に別のことをしている生徒もいる。もし自分が教員なら、それとなく肩を叩きそうだが、担当の John 先生はそんな素振りを見せない。プロジェクトには波があるらしい。あまりにも進んでいない時は介入することはあっても、事細かく指導しないのが彼の流儀で、この辺りの指導は先生によっても違っていた。実際に見に行ったからこそ分かる空気感だった。John 先生は完璧な学校はないと語る。自身も何もないところから工房のような教室を作るまでに至ったからこそ、「まずは小さくでも、始めるのが大事」と語っていた。

私にとっても一つ初めてのことがあった。それは、海外へのツアー旅行に参加したことだ。

それまで一人旅や友人と出かけることはあっても、日本人のツアーに参加することはほとんどなかった。今回は、

学校視察の三日間のツアーを友人が開催するということが25-
で参加し、他の教育者の仲間と共に「E」で学んだ
「デザインをツールとして、どのように日本のコンテクストで深い学びを実現するか?」という Essential Question
(本質的な問い)に取り組んだ。まさに我々もプロジェクトに取り組んでいたのだ。仲間がいたからこそ、お互いに振り返りながら、学びを深められた。

計画で、一泊だけすることになっていたロサンゼルス
の宿に悩んだ。値段は少し張るが、とりあえず駅に近そう
な日系の Miyako Hotel に泊まることにした。

予約も全て終えていた出発前夜。父から、曾祖父が昭和
十年代に世界一周をしていた時、カリフォルニアにも行っ
ていたことを告げられる。旅行記を見ると、なんと彼が泊
まっていたのも、Miyako Hotel だった。当時莫大な金を
かけたその旅行は、世界各国の料理や食品工場を見て、彼
の事業に活かすことが目的だった。

それから百年近く経ち、私も日本以外の教育の方法を見
て、日本でどう取り入れるかを模索しに、カリフォルニア
へと向かった。模倣ではなく、自分たちのやり方を編み出
すために、まずは「小さくでも」始めよう。

おかゆさん

あきの素生

(くうなるめがね)



大人になった今、お正月は、お正月ならではのごちそうが何よりの楽しみである。私にとつてのお正月ならではのごちそうとは、と改めて、つきつめて考えてみると、元旦に食べるお雑煮と、数の子とイクラとナマコ酢だった。ほかのあれやこれやも、もちろんおいしくいただくのだが、この四つは特別で、もういくつ寝ると、とほんのり聞こえてくる頃から、もうすぐ食べれるもうすぐ食べれると毎年心待ちにしている。

お雑煮は別として、数の子とイクラとナマコ酢といえど、お酒がすすむ「あて」の代表みたいな面々である。なので、どうしたつてお正月はお酒がすすむ。元旦は、お屠蘇の代わりに日本酒を呑む。この日本酒はお正月用のとつておき、おいしいお酒で、なおさらすすむ。昼夜を問わずちよつとつまみ、つまむとお酒が欲しくなり、という循環で、楽しくお正月を終える。

けれども、悲しいことに鉄の胃腸、肝臓を持っているわけではない。それなりにダメージを負う。なので、七草がゆという風習に心から感謝している。早春に芽吹く七草が邪気を払ってくれるというのだから、言うことなしである。

七草がゆはおいしい。お酒とは無縁の子どもの頃から、七草がゆが好きだった。七草の風味と塩加減、特別な調味料は入っていないのに、箸ならぬおさががすすむ。日頃食べなれているすずしろ（大根）の味わいが、一年に一度しか食べないこのおかゆをなじみ深く感じさせるのかもしれない。くたりと色を落とした緑の葉は、見た目にも体によさそうで、お正月の不摂生を帳消しにしてくれる気がする。

一人暮らしを始めてからも、七草がゆだけは食べようと心がけてきた。スーパでほどよい量の七草が入ったパックを見かけると、実家の七草がゆを思い出し、つい手が伸びそうになる。平たく言つて草なのに、伝統と過去の味覚の記憶から、すごい吸引力である。でも、自分の手には合わないよなあ、と伸びた手をレトルトに方向転換するのが常だ。最近、レンジでチンするだけのカップ入り七草がゆもあり、重宝している。

そんなことを毎年繰り返してきたが、今年はずいぶん生

の七草を手にした。小さく根のふくらんだすずな、すずしろがなんともおいしそうだ。六日の夜、七草を細かく刻んで、塩少々と米を半合、「おかゆ」の水量に合わせて水を入れ、翌朝炊き上がるように炊飯器をセットした。

七日の朝、起き出してみると、七草がゆの匂いが部屋に漂っていた。ああこれこれ、とうれしくなつて、炊飯器のふたをあげると、ところと白濁した上澄みに葉が浮かび、白いご飯が沈んでいる。水が多すぎたかとお玉でとぷりとかき混ぜてみると、いい塩梅のおかゆになった。シンブルな材料だからか、自分で炊いても実家の七草がゆとそう変わらない。そもそも材料を入れてセットするだけで、あとは炊飯器が調理してくれるのだ。なんだ、そう手間はかからないではないか、と今更ながらに気づき、年明けは、卵がゆ、中華がゆ、参鶏湯風おかゆと各種おかゆを炊いて、これでもかと胃腸を休めた。

おかゆはなんとなく、「おかゆさん」とさん付けしてしまふ。「雑炊さん」「お茶漬げさん」「炊き込みご飯さん」とは呼ばないので不思議だ。体調の悪いときにお世話になるので、感謝の念がすりこまれているのかもしれない。

そうこうしているうちに、体調を崩した。こういった不

測の事態に備え、レトルトのおかゆを常備している。白がゆ、梅がゆ、卵がゆと、レパートリーにも気を配って。袋を開けて、中身をお椀にうつし、レンジで温める。これだけで、体にやさしい食事をとることができる。なんとありがたいことか。「おかゆさん」のおかげで、立ち上がるのが億劫だけど何か食べなきゃ、という日々を乗り切ることができた。

今年は「おかゆさん」づいている。でもできれば、元氣なときにおいしく食べたい。



ご案内



ドラメリア
(座敷わらし)

奈良敏行＋三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

作品社 2024年2月刊行



定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)



・編集後記・

帰省しました。出迎えてくれた悪戯坊っちゃん(雉トラ)の図体の大きさに驚きました。子牛のように立派な体格！
なで回しすぎて、立派な前足でパンチされました。あんなにかわいいトラの子猫だったのに、すっかりおじさんぽくなったような気も……

ドラメリア (編集長)

定有堂教室の会場が3月から「とりぎん文化会館」に変わります。第6会議室です。心機一転。駐車場の便がいいのが、いままでの不便を解決してくれるかと思えます。楽しみにします。よろしく願います。

奈良敏行 (発行人)